検診で守る自分の未来

ウイルス性のがんで、性交渉の経験がある女性ならだれでもなる可能性のある「子宮頸がん」。がんが見つかる年代のピークは“30代前半”と、ほかのがんよりも若いことはご存知でしょうか。初期症状もほとんどなく、気づいたら手遅れになっていることも多いこのがん。現状について鹿児島大学の小林教授に伺います。エフエム鹿児島とリンクした内容をお届けします。

取材協力

鹿児島大学
医学部産科婦人科学教室
小林裕明教授

大学での診療に加え、研究や講演会と、様々な形で鹿児島の女性のがんに向き合う小林教授。長年の経験と最新の知識をもとに、子宮頸がんの“今”を教えてくれました。

子宮頸がんの原因について教えて下さい。

子宮頸がんは、性交渉でうつりうるHPV（ヒトパピローマウイルス）が主な原因です。ほとんどのHPVは感染しても免疫の力で消えていくのですが、運悪く持続するものがあり、そのウイルスが時間をかけてがんになります。

子宮頸がんの現状はどうなっていますか？

多くのがんは、罹患率（病気になる確率）が下がっている中で、子宮頸がんだけが罹患率が上がっています。毎年約1万人が子宮頸がんと診断され、3000人が命を落としています。現在、性交渉を経験する年齢が下がってきている背景で、子宮頸がんが見つかる年代のピークも40代～50代だったのが、30代前半がピークとなり、若年化してきています。子宮頸がんのピークが若年化していることで、罹患率・死亡率だけでは測れない悲しいケースも増えています。子どもを産んだことのない女性ががんの診断を受けるケースや、妊娠したあとの妊婦検診で子宮頸がんが見つかることケースもあるからです。

自覚症状はあるのでしょうか？

初期の「前がん病変」という段階では全く症状がなく、「浸潤がん」という段階になって気づく人が多いです。その時期には、性交渉時に出血があったり、おりものが茶色やピンク色になったりします。

治療はどんなことをするのですか？

「前がん病変」の段階で見つけることができたら、子宮の中のウイルスに感染した部位のみを手術で切り取ります。しかし、「浸潤がん」になってしまったら子宮ごととらないといけません。「前がん病変」の時期であれば、治療の可能性も広がるので、「浸潤がん」になる前に病院に来てほしいです。

子宮頸がんになった後に、妊娠・出産は可能ですか？

「前がん病変」の段階では、子宮を残すことができるので妊娠・出産もできます。しかし、「浸潤がん」になると子宮を取る必要があるので、残念ながら妊娠は難しいです。「浸潤がん」でも子宮の切り取り方を工夫することで、妊娠・出産する方法もありますが、早産しやすくなるので、決して楽ではありません。そのためにも定期的に検診を受けて、早い段階で気づいてほしいですね。

副作用の疑いのニュースもありますが、子宮頸がんワクチンについてはどう思われていますか。

海外ではワクチンの成分が引き起こしているわけではなく、思春期を経過すると起きる精神的な疾患の一つだと言われています。まずは、ワクチンの事を知った上で考える機会をもってほしいですね。

鹿児島に住む女性にメッセージをお願いします。

女性はストレスでいろいろ症状が出やすいと思います。何か変調があったときはどんな疾患であるかに関わらず、安心のために検診や診察を受けてほしいです。毎日を笑顔で過ごしてください。

子宮頸がん検診に行こう！

子宮頸がんは、早期発見ができれば、ほぼ100%治すことができるがんです。20歳以上になったら、2年に1回検診を受けましょう！

検診方法

1 問診

問診票に初潮の年齢、月経周期、生理痛の有無などを記入。その問診票をもとに医師からの質問に答えます。

2 視診（内診）

内診台に座り、医師から視診を受けます。その後、子宮全体、卵巣、卵管に腫れや痛みなどがないかを調べる触診が行われます。

3 細胞診＋HPV検査

やわらかいブラシで子宮頸部を軽くぬぐい、検査用に細胞を採取します。基本的に痛みはなく、1分もかからずに終わります。

4 検査終了

検査結果は1～2週間後にわかります。